

夏の乳牛管理

畜産課酪農係

今年は、4月以降の長雨と最近の酷暑の連日で搾乳牛の疲労消耗は著しいと思います。この季節において乳牛の管理上注意していただく事項について述べてみましょう。

1、牛舎および施設の管理

気温、湿度も急上昇し、そのうえ、害虫の発生で乳牛の生理、泌乳にも大きく影響している現在、牛舎は出来るだけ開放し、特に地窓をに造り舎内の通風に十分注意（舎内適温 10～15 度）するとともに、清潔を保ち害虫の発生襲来に気を配り、舎内のコンクリー床には1日2～3回清水の散布を行ない、平屋建牛舎においては、天井の上にワラ類を積むか、屋根の上に日覆をするのも一考です。

運動場においては、十分な日蔭場所をつくり清水の自由飲水の出来る様に心掛けてやれば、舎外運動も長時間行なえると思います。

2、牛体管理

分娩前後、搾乳最盛期の乳牛の疲労は特に著しいと思います。この時期には栄養障害、繁殖障害あるいは突発的な消化器疾病、乳房炎の発生が多く経営面にも大きく影響してきます。この時期の疾病は、全身疲労が著しいため管理改善、治療においてもなかなか快復し難いものです。

体力快復のため全身の血行を十分ならしめる目的で毎日2～3回のブラシかけを行い、水洗い、剪毛も実行し、特に妊娠末期や搾乳最盛期の乳牛に対しても、濃厚飼料に依存せず十分な生草、良質な禾本科乾草を与えて、体力消耗に注意をはらい、牛舎においても十分な牛舎面積を確保してやるよう注意し

ましょう。また朝夕涼しい時間は運動を兼ねて舎外に出し、出来れば夜間も舎外で涼ませてやりましょう。

3、飼料および飼育管理

酷暑と粗飼料の質の低下のため全般に食欲が低下しますが、濃厚飼料は朝、夕または夜間の給与を実行し、給与飼料の内容を時折変へ食欲を亢進させ、体力の消耗を未然に防ぐように努め、特に食塩、カルシウム、ミネラル類等を十分考え給与しましょう。

舎内においても自由に新鮮、清潔な水が十分飲めるように注意してやらなければなりません。

濃厚飼料については、特に腐敗醜酵しやすい季節でもあるため、よく注意して特に粕類は給与は差し控えてやりましょう。また今年は春の乾草作成時期に長雨で十分な確保が出来ていないと思いますが野草、畦草、でも質のよい所を選び冬期飼料を確保しておきましょう。秋作も早めに播付けを終え冬期に備えましょう。

4、搾乳および牛乳処理

乳牛の消耗が著しい季節だけに乳質の変化も生じやすい。搾乳時は十分な微温湯で乳房、乳頭及び乳房附近を洗浄し清潔を保ち乳質の向上に努めなければなりません。

搾乳は許される限り回数を減じ早朝あるいは夕方のような涼しい時間を選んで乳牛の疲労を少なくしてやるように努め、搾乳後は早急にろ過、攪拌、冷却を出来るだけ十分な流水の状態にして処理、保存しましょう。

岡山県の最近の畜産生産状況

岡山県の 38 年 2 月現在 (農林省調べ) の家畜飼養頭数は、乳牛 3 万 1,400 頭 (対前年比 115%)、肉用牛 10 万 1,100 頭 (103%)、豚 2 万 5,000 頭 (71%)、鶏 345 万羽 (97%) で、乳牛の伸びはほぼ順調であるが、豚・鶏は市況の影響から減少をみている。37 年中の畜産物生産では牛乳 6 万 6,000 トン (119%)、鶏卵 3 万 4,800 トン (121%) で、両者ともかなり増加しているが、前年に比べその伸び率は鈍っている。また家畜生産では和牛子牛の生産は 3 万 3,300 頭で前年にほぼ横ばい、肉牛生産は 1 万 300 頭とやや増加し、肉豚生産は 3 万 7,500 頭で、前年に比べ約 20% の増加であった。

病気診断の急所一覽表

伝染病	神経と運動器の病気	寄生の病 (虫、蛭)	胃腸内の虫病	栄養関係病	腎臓病	心臓病	呼吸器病	胃腸病	病気の種類
① 流行性 (流感) がもつとも典型的 ② 地方的な特殊な症状 (ダニ熱) ③ 流産 (ブルセラ、トリコモナス)	① ふるえ、足腰のふらつき (日射病、熱射病) ② 関節がはれてビッコをひく (関節炎)	① 食欲不振。 ② 下痢・便秘・消化不良。 ③ 栄養が悪くなる。能力の低下。 ④ 発熱、黄疸、貧血、浮腫	① 消化不良、はらいたを起す。 ② 栄養が悪くなり、発育がおとろえ乳量が下る。	① 泌乳量、発育など能力が下る。 ② 下痢・便秘・食欲不振・乳熱の症状を起すのはケトージス。 ③ 二等乳、繁殖障害、いかものぐい、ビッコをひくことなどが第一にでてくることもある。	① 尿が少なく濃くなる。 ② 熱がでる。 ③ 歩き方がぎこちなく腰をおすといたがる。	① 心臓病 (心囊炎) ② 脈博・心臓の鼓動の変調 (心臓衰弱、その他のふつうの心臓病)	① 急に熱のでるのが特色 ② 呼吸と脈搏数が多くなる ③ 熱のでるときふるえがくる	① 食欲、かみかえしが止る ② はらいたのようす、腹のふくれ ③ 胃のうごきがとまる ④ 下痢、軟便、消化不良	第一に出てくるようない
① 流感は流行性で高熱ではじまる ② ダニ熱は放牧牛に多く、下痢・衰弱・発熱・貧血・血尿。 ③ トリコモナスは自然交配のメスにおこり重い子宮内膜炎となる。	① 食中毒、ケトージスとのちがいは、神経症状が中心で、暑さや日光の直射など管理状態を考慮合わせること。 ② 関節に熱をもつこと、他の症状のないこと (発熱や下痢など)	① 上のようないろいろの症状がいかつかか重なってでるが、どれかアノチゲンの注射を定期的に行うこと。	① 慢性にじわじわとくるのが特色 ② 貧血し浮腫ができるのは重い ③ 糞を検査してもらうことが大切	① 上のようないろいろな症状が重なり、どこに病気があるのかと迷うような状態が大事な目的につけてころ。 ② ケトージスは産前産後、最高泌乳期におこる。 ③ 飼養管理をよく検討してみることに	① 高い熱のでる病気・中毒・重い胃腸病などにつづいて起るのが特色 ② 尿をとって比重をみたり、沈澱物をしらべること。	① 消化不良からはじまつて、心臓の鼓動がはげしくなり、頸静脈のふくれ、浮腫ができるなど一連の症状がつづくは心囊炎。	① 熱、脈、呼吸の変化が中心で他の症状は少ない。 ② セキ、鼻汁がでる。 ③ 熱は一定の型をとり、急に上つてしばらくつづき急に下るのは良性的の肺炎	① 下痢、不消化便、便秘は胃腸カタル ② 胃がふくれ、呼吸と脈が早くな頸静脈がふくれるのはガス、食滞 ③ 手当の効果がたないのは創傷性胃炎 ④ 熱がでるのは重い。神経症状がでるのも食中毒、自家中毒で重い	病気をみわけるところで目をつける
① 流感とふつうの呼吸器病とは伝染病の予防上熱とわけることが大切。 ② ダニ熱は中心がわがみは熱、血尿が起るが、わずやみは放牧になれた牛でもおこるが、ダニ熱は放牧になれた牛ではおこらない。 ③ ブルセラとふつうの流産との見わけが大切。	① 食中毒、ケトージスとまちがえやすい。 ② 骨軟症とまちがえやすい。 ③ 流感の一症状として関節炎を起すことがある。	① 胃腸病、結核、栄養関係病などとまちがえやすい。 ② 二等乳、空胎などを起しやすい。	① 胃腸病とまちがえやすい。 ② 若牛の発育不良の大きな原因の一つ。	① 牛乳採取の不手際から起る二等乳や単純な繁殖障害とまちがえやすい。 ② 胃腸病とまちがえやすい。 ③ 乳熱や脳の病気とまちがえやすい (ケトージスの神経型の場合) ④ 骨軟症の初期はビッコをひくこともあちから運動器病 (蹄・関節の病気) とまちがえやすい。	① 原因となる熱病に気をとられて尿の変化する腎臓結石、膀胱結石は食滞と全く同じような症状を起す (はらいたの症状)	① 創傷性心囊炎は胃腸病とまちがえやすい。	① 流感とのみわけが大切。 ② ふるえは食滞でも起る。 ③ 貨車輸送された牛は夜中にしばしばセキをするがカゼではない。	① 心囊炎の初期には胃腸病の症状がでる。 ② 慢性のときは寄生虫が原因となつて、産前産後では原因が不明。 ③ 胃が原因となつて、産前産後では原因が不明。 ④ 胃が原因となつて、産前産後では原因が不明。 ⑤ 胃が原因となつて、産前産後では原因が不明。 ⑥ 胃が原因となつて、産前産後では原因が不明。 ⑦ 胃が原因となつて、産前産後では原因が不明。 ⑧ 胃が原因となつて、産前産後では原因が不明。 ⑨ 胃が原因となつて、産前産後では原因が不明。 ⑩ 胃が原因となつて、産前産後では原因が不明。	まちがえやすい病気その他

(註)

異常を発見した場合早めに技術者の指示を受けましょう。夏期の乳牛飼養管理について書きましたが、要は涼しく清潔に商品生産と事故未然防止につとめる事が急務です。